

ニューズレター 目次

1	第 30 回セミナー (武蔵工業大学) のお知らせ	1-3
2	編集委員会からのお知らせ	4
3	国際交流委員会からのお知らせ	4-5
4	環境社会学会第 16 回総会報告	6-8
5	第 29 回セミナー (しが) 報告	9-25
6	事務局より	25-26

1 第 30 回セミナー (武蔵工業大学) のお知らせ

【日 時】 2004 年 12 月 11 日 (土) 10:00 ~ 17:00 (9 時 30 分受付開始)

【場 所】 武蔵工業大学 横浜キャンパス 3 号館 (講義研究棟)

【参加費】

1500 円：参加申し込みは不要です。当日直接会場にてお支払いください。

【会場までの交通】

▼下記のアドレスに地図および案内があります。

<http://www.yc.musashi-tech.ac.jp/japan/access/index.html>

▼東京方面から電車で：

渋谷から東急田園都市線であざみ野まで行き (急行利用で約 20 分)、横浜市営地下鉄に乗り換えて 1 つ目の中川駅で下車してください。

▼飛行機または新幹線で (羽田空港・横浜・新横浜方面から)：

羽田空港からはバスで新横浜駅まで行くか、京浜急行で蒲田経由で横浜駅へおいでください。横浜駅へのバスもありますが、降車が東口 YCAT なので、地下鉄駅まで距離があります。

時間的には京急電車が若干早いですが、乗り継ぎは新横浜駅までバスで来られるのが楽です。

いずれの場合も、横浜市営地下鉄に乗り換えて中川駅で下車してください。

中川駅まで横浜駅からは約 25 分、新横浜駅からは約 14 分です。

▼キャンパスは中川駅より徒歩 5 分です。

【昼食について】

お弁当 (600 円程度) が必要な場合は、11 月 29 日 (月) までに萩原研究室宛 FAX (045-910-2565) でお申し込み下さい。なお、学生食堂は土曜日は休業、周囲にもほとんど食堂はありません。

■スケジュール

受付開始 9:30

自由報告 10:00 - 12:50

1. 10:00 - 10:30
2. 10:35 - 11:05
3. 11:10 - 11:40
4. 11:45 - 12:15
5. 11:20 - 12:50

シンポジウム 14:00 - 17:00

■シンポジウム 14:00 - 17:00

「環境をめぐる正当性／正統性の論理——時間・歴史・記憶——」

パネリスト：細川 弘明（京都精華大学）＋三浦 耕吉郎（関西学院大学）＋家中 茂（沖縄大学）

討論者：池田 寛二（法政大学）＋松田 素二（京都大学）

司 会：鬼頭 秀一（恵泉女学園大学）

【シンポジウムの趣旨】

環境社会学の多様な対象を構成する、さまざまなレベルの社会集団あるいは個人が主体となって行なわれる、環境の保全や共存にかかわる活動や運動そして政策、開発に抗して展開されるなにかを守りたいという運動やその根底にある意識、そのような活動、運動、政策というものは何によって正当化されるのだろうか。それは、往々にして、その主体において共有される「記憶」（負の記憶も含めて）であったり、その主体を構成している社会集団の「伝統」や「歴史」であったりする。「記憶」「歴史」ということがさまざまな活動や運動そして政策の「正当化」として働いているし、また、働くべきだという主張がある。

「記憶」や「歴史」を「進歩」という近代の一つの理念によって置き換えていこうとする論理の中で展開される「開発」に対して、また、「環境保護」の論理に対して、生活者を主体として「記憶」や「歴史」を一つの抵抗の原理として展開する動きを、今までの環境社会学は特に重点的にみてきた。さまざまな意味での環境史的アプローチが注目されてきたのもその流れであろう。

しかし、一方で、ある種の「正統化」された、「記憶」や「歴史」は、その「記憶」や「歴史」を必ずしも共有してこなかった、あるいは共有を拒否してきた人たちにとっては、抑圧として働き、権力作用を持つ。そのことは、「政策」における「合意形成」という場面でしばしば起こる。「合意形成」という問題は「合意」を強いられる側から捉える視点も必要であろう。その時に、それを「正統」化するものとして、「記憶」や「歴史」はまさに権力として働く場合がある。

われわれは、このような視点に立って、「環境」にかかわる多様な活動、運動、政策において、「記憶」や「歴史」というものの「正当性／正統性」というものをどのようなものとして扱い、考えていくべきであろうか。

翻ってみるに、環境社会学の研究は、環境問題の社会学と環境共存の社会学というように便宜的に分類されてきたが、最近では、まるでそれが何か固定的なものとして捉えられ、制度化し、棲み分けされつつあるようにも見受けられる。今回のシンポジウムのテーマは、まさに、その二つの社会学の狭間にあり、理論的にも交差する領域である。また、一方で、「環境正義」という、おそらく、現代の環境をめぐる問題の中でもっともホットで重要な主題を議論する際にも、今回取り上げる論点は本質的な問題を構成するであろう。そして、それは、従来の環境正義にかかわる議論の狭い枠組みを越えて、環境社会学の根幹も揺るがすような問題を提起しているとも言えよう。しかし、現在の環境社会学の中で、なぜか、その領域について議論されることが十分できていない。今回のシンポジウムでは、安易な制度化された環境社会学の棲み分け論を掘り崩すような、環境社会学研究の根本を問う作業をしてみたい。

鬼頭 秀一（恵泉女学園大学）

■自由報告（報告時間 20 分，質疑 10 分）10:00 - 12:50

【A. 公共事業＝運動関係とその転換】（司会：足立 重和）

- A1 原子力をめぐる政治的対立構造の変化と、政策転換への展望
本田 宏（北海学園大学法学部）
- A2 九州新幹線建設における漏水被害対策の成立とその問題点
角 一典（北海道教育大学旭川校）
- A3 平取ダム建設のアイヌ文化への影響調査について
貝澤 耕一（アイヌ文化環境保全対策調査室）・岩崎 まさみ（北海学園大学）
- A4 参加型会議を市民で検証する～「三番瀬円卓会議ふりかえりワークショップ」の実践～
三上 直之（東京大学大学院）
- A5 歴史的環境保全運動の〈保存する根拠〉と〈保存のための戦略〉～福山市・鞆港保存運動を事例に～
森久 聡（法政大学大学院博士後期課程）

【B. 環境計画と環境観】（司会：平岡 義和）

- B1 アフリカ、サハラ南縁地域における家庭の薪消費量の考察～改良カマドはなぜ普及しなかったのか～
石山 俊（名古屋大学大学院博士後期課程）
- B2 〈流域像〉構築から自然保全の試みへ～記憶と経験の共有を通して～
福永 真弓（東京農工大学大学院博士後期課程）
- B3 ある二つのムラの関係性とその環境観～浜の利用をめぐって～
中川 千草（関西学院大学大学院博士後期課程）
- B4 私たちと里山との関係性を描き直す～里山ボランティアによる調査・計画づくりの現場から～
松村 正治（東京工業大学大学院社会理工学研究科）
- B5 景観と土地所有～「景観法」の分析～
栗本 京子（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科）

【C. 環境ガバナンスと環境情報】（司会：鳥越 皓之）

- C1 おばあちゃんの葉っぱビジネス～四国の山村・持続可能性への挑戦～
佐野 淳也（「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議（ESD-J））
- C2 砂漠に木を植えた結果～砂漠の植林ブーム～
高津 佳史（特定非営利活動法人サヘルの森）
- C3 「市民風車」による社会的ネットワークの生成と事業の展開可能性
西城戸 誠（京都教育大学）・丸山 康司（産業技術総合研究所）
- C4 「市民」による公共空間の管理～ホロヒラみどり会議・ホロヒラみどりづくりの会の 6 年～
平川 全機（北海道大学大学院文学研究科）
- C5 一般市民は二酸化炭素地中貯留技術に関する情報をどのように受け止めたか
宇野 元雄（（財）地球環境産業技術研究機構）・森 やす子（（株）情報環境デザイン）

■セミナー事務局

萩原 なつ子＋大塚 善樹
武蔵工業大学 環境情報学部大塚研究室
〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 3-3-1
TEL: 045-910-258、FAX: 045-910-2605
Email: otsuka@yc.musashi-tech.ac.jp

■担当研究活動委員

中澤 秀雄，帯谷 博明（会場）＋鬼頭 秀一（シンポジウム）＋古川 彰（自由報告）

2 編集委員会からのお知らせ

投稿の募集

『環境社会学研究』への投稿を募集します。投稿を希望する方は、投稿規定・執筆要領など（『環境社会学研究』に掲載）を熟読の上、あらかじめ編集委員会宛に原稿の種別（原著論文・研究ノート・調査資料・レターズ）をご通知下さい。投稿は随時できますが、**11号の投稿申し込み締め切りは2005年1月13日（木）、投稿原稿の提出締め切りは2月末日（いずれも消印有効）**です。また、編集委員会では論文を受け取った時点ですぐに査読手続きに入ります。従いまして投稿が早いほど編集委員会による最終的な採決以前に査読結果を踏まえて修正するための時間が長く取れることとなります。なお、投稿資格は会員に限られておりますので、入会されていない方は、投稿以前に入会の手続きをお願いします。

【お問い合わせおよび投稿の申込先】

環境社会学会編集委員会事務局

〒305-8574 つくば市天王台1-1-1 筑波大学・体育科学系 松村研究室

Tel/Fax: 029-853-6378

E-mail: matumura@taiiku.tsukuba.ac.jp（matsu・・・ではありませんので注意して下さい）

『環境社会学研究』第10号に投稿を申し込みます

タイトル：

論文・研究ノートなどの種別：

氏名

所属

連絡先： 自宅／勤務先（どちらかに○をつけてください）

住所： 〒

Tel：

Fax：

E-mail:

（松村 和則／編集委員会事務局長）

3 国際交流委員会からのお知らせ

2004年国際社会学会第24研究部会「環境と社会」ソウル国際会議に本会より8名参加

国際交流委員長 寺田 良一

すでに時間が経過していますが、本年6月27日から30日にかけて、韓国ソウル市のソウル国立大学において、国際社会学会第24研究部会「環境と社会」(ISA, RC24)、韓国社会学会、韓国環境社会学会が主催する国際会議が開催されました。会議名は、「グローバル化、ローカリゼーションと環境」です。実行委員長の李時載氏（韓国カトリック大学）から、今年の初めごろにご案内をいただき、東アジアでの開催なので、日本からも奮って参加してほしいとのご意向を伺っていました。とかく、「受信」はしても「発信」はあまり得意でない日本のアカデミズムですが、とりわけグローバル化の影響を強く受ける環境問題を研究する環境社会学者は、そうした悪しき「伝統」にあぐらをかいている訳にはいきません。李氏からの呼びかけを受けて学会のメールマガジン等を通じて会員に参加を呼びかけました。

結果、会長の嘉田由紀子氏、前会長の船橋晴俊氏をはじめ、本会から8名の参加者を得、いずれの方からも報告もしていただきました。決して多いとはいえませんが、全体で数十名規模の会議でしたので、一国からの参加者としてはおそらく主催国韓国に次ぐ人数だったのではと思います。人数はともかく、日本の環境社会学会の活動報告を中心とした嘉田会長の基調報告をはじめ、船橋氏の六ヶ所村問題、風力発電、産業廃棄物、基地および空港騒音問題、地域おこし等、現在日本が直面しているさまざまな環境問題に関する諸報告を通じて、各国からの参加者に、日本の諸問題や環境社会学に関する強い印象を与えたことは間違いありません。現に、RC24の代表であるオランダのアーサー・モル氏（「エコロジカルな近代化」論の主張者として知られる）は、筆者との雑談の中で、「日本の環境社会学会が会員600人以上という大規模な組織で、このように活発な研究活動が行われているとは今まで知りませんでした。大変心強く思います。」と語ってくれました。逆にいえば、これだけの規模と活動内容を持ちながら、各国にそれが知られていない、発信してこなかったことが、怠慢であったといえるかもしれません。

嘉田氏は、本学会の12年の活動の概略や、蓄積されてきた分析枠組等を紹介し、またご自身のフィールドである琵琶湖の今昔のスライドショーを披露しました。英語でもあのいつもの親しみやすい「嘉田節」(失礼)で、フロアを笑わせ魅了しました。「環境負荷（使用済み核燃料）を周辺地域（六ヶ所村）への押し付け」を環境的不公正の問題として提起した船橋氏の報告は、海外の環境社会学者にも理解されるようになってきた「受益圏・受苦圏」概念ともあいまって、海外の事例にも頻繁に見られる環境負荷の外部転嫁問題の分析として、注目されていました。水域の開発問題は、現在韓国で大きな社会問題となっているセマングム干拓問題にも通じますし、原発問題は、近年はすぐれて東アジアの問題となって来ています。「国は違っても、環境問題はよく似ている点が多いですね。」といった会話が、あちこちで交わされていたように思います。

少し単純化しすぎるかもしれませんが、この会議に参加して、筆者は、アジア的環境リアリティ、ヨーロッパ的環境リアリティ、北アメリカ的環境リアリティという、3つの類型を考えていました。（おそらくは、少なくとももう1つこれに、発展途上国の環境リアリティを付け加えなければならないと思います。）アジア的な状況とは、一般に経済成長志向的な国家が、強権的ないし権威主義的に工業化、公共事業、原発建設等を推進することが多くの産業公害、自然破壊などの環境問題を引き起こし、それに住民・市民運動や民主化運動が地域の生活者の論理に立って抵抗する、環境の公正性が問題となるパターンです。日本、韓国、台湾などの報告者が取り上げた事例は、かなりがこの図式に当てはまるものでした。同時に、欧米系の環境社会学研究の中では、私たちにはきわめて現実的でなじみ深いこの種の環境問題研究が、むしろ少数派であることに少なからずショックを受けました。（環境問題が、より直接に生命や生活基盤の破壊に関わる途上国の問題状況にいたっては、さらに報告事例が少ないことはいまでもありません。）

「最先端」の研究動向とはいえば、もちろんそれはそれで非常に知的刺激に富んだ報告でしたが、たとえば、ヨーロッパの「環境国家論」とアメリカの「環境対決」的環境社会学の妥当性を比較したW.フロイデンバーグ氏の基調報告がありました。同教授は、現在の研究潮流が、環境と経済の両立可能性仮説にもとづく「エコロジカルな近代化」論、「内省的近代化」論（ギデンズ、ベック）などのヨーロッパ系の「環境国家論」と、「生産の踏み車」論（シュネイバーク）など資本主義経済を環境とは両立困難なシステムとみなす傾向が強いアメリカの環境社会学に二分されるとし、結論として、「環境国家論」の根拠に軍配を上げる報告をしました。A.モル氏の、PRTR（汚染物質排出移動登録制度）、エコ・レイベリング等を取り上げた「リスク社会における変革力としての環境情報」、「環境的改革の情動的様式」に関する報告も、大変示唆に富んでいました。

筆者は、これら国際環境社会学の知的牽引力となっている欧米系の指導的研究者の理論的生産力に敬服する半面、アジアの「辺境」の研究者としてもどかしさも感じていました。住民とともに自然破壊や水質汚染問題に地道に取り組むアジアや途上国の環境社会学研究者たちが、言語的文化的障壁もあって、相互にリアリティを共有したり、国際的に問題提起をしたりといった点で、やはり遅れをとっているようです。今回の参加者も半分以上は若手研究者でしたが、今後はイチローや松井よろしく、気後れせずに海外の学会に参加する若い世代の研究者の増加によって、こうした「遅れ」も解消していくものと期待しています。

もちろん、すべてが英語で進行する国際会議で初めて報告するのは勇気がいるものです。今回は、試験的に関東圏の報告予定者3人で、報告練習会を実施しました。わかりづらい表現やパワーポイントの作り方などを修正した結果、当初よりかなり改善されたようです。今後ともこうしたサポートも充実させていきたいと思っております。

4 環境社会学会第16回総会報告

2004年6月26日(土) 滋賀県守山市

1. 議事に先立ち、榊渥俊子氏を議長選出
2. 会長挨拶：会長 嘉田由紀子

【報告事項】

1. 2003年度事業報告

(1) セミナー、研究例会の開催

第27回セミナー 2003年6月27-29日：熊本県水俣市

第28回セミナー 2003年12月14日：京都精華大学（自由報告+シンポ「河川行政の転換と地域社会」）

三学会合同シンポジウム 2003年6月8日：「環境政策研究のフロンティアIV」キャンパスプラザ京都

沖縄・九州研究例会 2003年7月19日：「開発と環境のせめぎあいー生活世界からの環境学」沖縄大学

北海道地区研究例会 2003年5月14日：「新潟水俣病をめぐる制度・表象・地域」北海道大学

関東地区研究例会 2003年11月22日：「環境基本法の検証と環境社会学～環境政策の軌跡と課題」

沖縄地区研究例会 2004年2月7日：「学問における実践とはー当事者性・ローカリティの観点から」：

沖縄大学

特別研究例会 修士論文発表会 2004年3月13日：法政大学

- (2) 『環境社会学研究』9号の発行、有斐閣との契約更新
- (3) ニュースレターの発行(32, 33, 34号)、メールマガジンの発行(28～46号)
- (4) ホームページの改訂
- (5) 会員追加名簿の発行
- (6) 運営委員会の開催(持ち回り、多数)

2. 運営委員会と事務局の体制

- (1) セミナー・研究例会などのサポート
- (2) メールマガジンの発行
- (3) 事務局：名簿管理、会計（編集委員会会計と一本化）、その他
- (4) ホームページの更新

3. 会員数の推移

2002年度末会員数 651名 → 2003年度末会員数 685名

【審議事項】

1. 監事の選出

監事については、本来昨年の総会で決めるべきところ、決めていなかった由事務局から説明があり、その上で、鳥越皓之・海野道郎両氏に決定した。

2. 2003年度決算報告(含む監査報告)

以下のような決算報告および監査報告がなされ、承認された。

- (1) 基本会計

表1. 2003年度決算(円)

収入			支出		
費目	03年度予算	03年度決算 注	費目	03年度予算	03年度決算 注
前年度繰越金	2,686,749	2,686,749	事務経費・消耗品	100,000	75,580
会費	2,872,800	4,073,000 *1	郵送費等通信費	350,000	295,905
利息	70	17	印刷費	250,000	291,740 *2
雑収入	0	0	会議費	300,000	50,000
			アルバイト費	600,000	537,582
			業務用機関誌	126,000	0 *3
			編集委員会へ	1,414,000	1,612,000 *4
			セミナー・例会補助	100,000	90,482 *5
			事業積立金	200,000	200,000
			設備備品費	100,000	0
			予備費	2,019,619	836,799 *6
			支出小計		3,990,088
			次年度繰越金		2,769,678
合計	5,559,619	6,759,766	合計	5,559,619	6,759,766

*1 のべ563人分(納入率84.0%=延べ会費納入者÷03年度末会員) *2 ニューズレター3回+追加名簿 *3 学会会計の一本化に伴い、実質廃止 *4 2500円×564人+2002年度未払い分2000円×101人 *5 例会会場費など *6 編集委員会会計へ補填

(2) 編集委員会会計

表2

収入			支出		
費目	03年度予算	03年度決算 注	費目	03年度予算	03年度決算 注
前年度繰越金	1,387,157	1,387,157	制作手数料	4,410,000	4,410,000 *3
会員誌代	1,510,000	1,612,000 *1	発送費	150,000	123,530
広告収入	140,000	10,000	事務局経費	200,000	166,143
雑誌売上収入	1,736,750	853,717 *2	以上の支出小計	4,760,000	4,699,673
学会事務局より補填	0	836,799	予備費	13,907	
その他	0	0	次年度繰越金		0
合計	4,773,907	4,699,673	合計	4,773,907	4,699,673

*1 2500円×564人+2002年度未払い分2000円×101人 *2 有斐閣販売代金=565,950円, 新曜社販売代金=60,497円, 販売事務局直販など=227,270円。 *3 有斐閣への支払い。2002年度制作手数料未払い分2,205,000円(制作費1,890,000円+制作手数料追加分315,000円)。2003年度制作手数料2,205,000円(制作費1,890,000円+制作手数料追加分315,000円)。

(3) 事業積立金(表3)

(4) 2003年度末資産(表4)

表3. 2003年度事業積立金(円)

	03年度予算	03年度決算
前年度繰越金	1,800,000	1,800,000
本年度積立金	200,000	200,000
本年度末残高	2,000,000	2,000,000

表4. 2003年度末資産表(円)

	合計
合計	4,769,678 *1
内訳	
学会事務局振替口座	1,738,683
学会事務局通帳	672,526
学会事務局現金	141,775
旧編集委員会通帳	1,449,574
旧編集委員会振替口座	565,950
販売事務局	201,170

*1 事業積立金を含む

3. 2004 年度事業計画

以下のような事業計画が提案され、承認された。

- (1) セミナー，研究例会の開催
 - ・三学会合同シンポジウム 2004.6.12 獨協大学：予防原則と環境リスク
 - ・第 29 回セミナー 2004.6.26-27 びわこ（滋賀県守山市他）
 - ・第 30 回セミナー：2004.12 武蔵工業大学環境情報学部（神奈川県横浜市）
 - ・各地区例会，修論報告会
- (2) 学会誌『環境社会学研究』の編集・発行・販売
 - ・第 10 号の発行
 - ・第 11 号の編集
 - ・第 4 号の増刷
 - ・販売事務局の移転および 1～10 号の販売促進
- (3) ニュースレターの発行（3 回程度），メールマガジンの発行（随時）
- (4) ホームページの更新（随時）
- (5) 会員名簿（追補版）の発行
- (6) その他

4. 2004 年度予算案

(1) 予算案

以下のような予算案が提案され、承認された。

表 5. 2004 年度予算案（円）

収入			支出		
費目	04 年度予算	注	費目	04 年度予算	注
前年度繰越金	2,769,678		事務経費・消耗品	150,000	
会費	3,024,000	*1	郵送費等通信費	400,000	
学会誌売り上げ	1,000,000	*2	印刷費	250,000	
利息	20		会議費	150,000	
			アルバイト費	650,000	*3
			学会誌制作費用	2,205,000	*4
			学会誌バックナンバー増刷	346,500	*5
			学会誌買い取り	157,500	*6
			セミナー・例会補助	100,000	
			事業積立金	200,000	
			予備費	2,184,698	
			支出小計	4,609,000	
合計	6,793,698		合計	6,793,698	

*1 2004 年度末会員数 700 名，うち一般会員 7 割，学生会員 3 割，会費納入率 80% と想定。 *2 有斐閣市販分 60 万円，学会の直販 40 万円，と想定。 *3 学会事務局アルバイト（5 万 / 月 × 12 ケ月），学会誌・ニュースレター発送作業アルバイトなど。 *4 有斐閣へ *5 第 4 号を 300 冊増刷 *6 新曜社より第 5 号を 100 冊買い取り

(2) 事業積立金（案）

表 6. 2004 年度事業積立金（円）

	04 年度予算	03 年度決算
2003 年度繰越金	2,000,000	1,800,000
2004 年度積立金	200,000	200,000
2004 年度末残高	2,200,000	2,000,000

5 第29回セミナー（びわこ）報告

日 時：2004年6月25日（金）～27日（日）

場 所：滋賀県守山市

共 催：滋賀県立琵琶湖博物館・滋賀県立大学 後援：淡海環境保全財団

5-1. セミナー報告（セミナー事務局より）

さる6月25日から27日にかけての第29回セミナーは、みなさまのご協力によりまして、下記の日程を無事に終了することができました。準備期間が短かったために、バタバタと企画を決めていきましたが、嘉田由紀子会長はじめ、みなさんにアドバイスいただきながら何とか終えることができました。あまり私がセミナー日程自体の柔軟性を理解していなかったので、下川、水俣につづくとばかりに背伸びをしてしまったようで、そのあたりの当初の気負いは反省しております。

とはいえ、琵琶湖博物館の牧野厚史さんと共に練っていったプログラムは、結果的には「盛りだくさん」「てんこもり」という評価？をいただいたようで、参加していただいた方々はやや満腹状態になってしまったのかもしれない。武村正義さんの欠席は残念でしたが、特別インタビューという形式も、講演とは異なって味のある時間になったと思います。ゲストの折衝にあたっていただいた嘉田会長や聞き手の野田浩資さん、脇田健一さんの準備は大変でしたけれど、27日のパネルディスカッションも、当初は並列であった二つのものを縦列に組み直したために、やや時間が足りなくなった感はありませんでしたが、事前研究会も実施して、企画者としては大変内容の濃いものになったと感じております。また、全日程を通じてあまり会場を移動せずにじっくりと論議を煮詰めて欲しいというねらいは達成できたようにも思います。

セミナー準備につきましては、滋賀関係の会員および大学院生には大変お世話になりました（*）。とくに滋賀県立大学の院生は学会員でもない異なる専門のものが多かったのですが、快くスタッフを引き受けていただき、的確にそれぞれの役割を担当していただきました。運営面でも快適に過ごせたという声をいただいたときには感謝と安堵いたしました。牧野さんには、環境社会学というコンセプト面で大きく頼ってしまいました。本当に助かりました。また、会場となったBRCの茶谷昌夫さんには本当に無理をいろいろと聞いていただき、直前まで状況が変動するやりにくい学会を引き受けて頂いて感謝しております。

*第29回セミナー事務局

近藤 隆二郎（滋賀県立大学）、牧野 厚史（琵琶湖博物館）、野田 浩資（京都府立大学）、脇田 健一（龍谷大学）、小坂 育子（水と文化研究会）、上田 洋平（滋賀県立大学／院）、赤星 心（奈良女子大学・院）、近藤 紀章、村上 浩継、金尾 滋史、樋口 幸永、片上 敏喜（以上 滋賀県立大学／院）、茶谷 昌夫（琵琶湖リゾートクラブ（BRC））

心残りとしては、セミナーを通じて地元へ何かを還元するということができにくかったことが挙げられます。参加規模と準備期間、宿泊場所等の関係で開催場所も何回か変わったため、なかなか地元主体とのうちあわせまで十分にできませんでした。個人的には沖島で開催したかったのですが、セミナーの規模とは相容れませんでした。徐々にセミナーが大規模化する方向ならば、巨大会場での研究討論会的なものとエクスカージョンを中心とする地元主体のものを同一にすることにはやや無理が生じているように思います。

最後になりましたが、沖島漁協の女性部のみなさんが懇親会で出した湖魚料理の評判を大変気にしておられましたので、もしも機会がありましたらその感想などを伝えてあげてください。あと、セミナー冊子の表紙は上田洋平君のパートナーである福島三佳さんに描いて頂きました。また、特別インタビュー時のテーブルに飾られていた花は、樋口幸永さんが伊吹山の麓から前日に摘んできた野草です。会場の横断幕は金尾滋史君に書いてもらいました。それぞれ好評でしたのでお知らせしておきます。セミナーにご協力いただいたみなさん、ご参加いただいたみなさん、ありがとうございました。

（近藤 隆二郎／滋賀県立大学）

(1) セミナー会計報告

表のとおり、6万円弱の黒字となりました。これは、滋賀県立大学等学術文化振興助成金(学術交流推進事業)の交付を受けたためです(この助成金の決定がこの8月でしたので予算として計上できませんでした)。なお、エクスカーション①「エリ漁体験とツボカキ」は、残念ながら当日波が高いために、守山漁協でのお話と朝食へ変更されました。守山漁協側からは委託金半額分の返金(5万円)がありましたが、その分はセミナー運営経費とさせていただきます。懇親会分として寄付いただいた方ありがとうございました。

(近藤 隆二郎/滋賀県立大学)

第29回セミナー会計報告

収入	(円)
参加費合計	2,715,480
当日参加費	35,000
滋賀県立大学より	100,000
懇親会寄付金	9,795
合計	2,860,275

支出	(円)
宿泊費・懇親会費・昼食・バス代	2,247,901
エクスカーション委託費	121,450
資料代	29,600
懇親会費(沖島漁協)	70,000
保険代	6,000
ゲスト謝礼等	78,000
プレ調査費用	30,000
事務局経費	59,123
学生バイト代	119,500
報告書冊子印刷代	40,000
合計	2,801,574
残高	58,701

(2) プログラム

【6月25日(金)】 各種委員会(BRC)

15:00～編集委員会, 19:00～運営委員会, 20:00～国際交流委員会, 研究活動委員会

【6月26日(土)】

8:30～13:30 エクスカーション(コースによって出発時間は異なる)

①エリ漁体験とツボカキ

②琵琶湖博物館の舞台裏

③沖島の暮らしとこれから

④里山の環境問題と地域社会の対応

13:45～14:45 総会

15:00～18:30 特別インタビュー 「“びわこ”というシナリオの来し方と行く末」

◎司会：牧野 厚史（琵琶湖博物館）

●総論：「琵琶湖をめぐる政策・環境史」 嘉田 由紀子（京都精華大学）

●武村 正義（元大蔵大臣・元滋賀県知事）に聞く；「びわこー環境県というシナリオの創成と展開」

◎聞き手：脇田 健一（龍谷大学）

※武村氏の体調不良のため、嘉田会長と脇田さんのトークに変更しました。

●吉良 竜夫（生態学者・滋賀県琵琶湖研究所前所長）に聞く；「琵琶湖の研究というシナリオ」

◎聞き手：野田 浩資（京都府立大学）

●鳥越 皓之（筑波大学・元環境社会学会会長）に聞く；「水と人というシナリオ」

◎聞き手：近藤 隆二郎（滋賀県立大学）

18:30～懇親会（沖島漁協婦人部による湖魚料理あり）

【6月27日（日）】

09:00～12:00 自由報告

13:00～17:15 シンポジウム 「地域の“シナリオ”をどのように生み出すか？」

13:00～15:15 [シンポジウムA]：自然の再生というシナリオ

司会：牧野 厚史（琵琶湖博物館）

パネリスト：亀澤 玲治（環境省），池田 啓（姫路工業大学・コウノトリの郷公園），北村 勇（守山漁業協同組合副組合長），倉橋 義廣（早崎ジオトープネットワーク），鬼頭 秀一（恵泉女学園大学）

15:30～17:30 [シンポジウムB]：地域の豊かさというシナリオ

司会：浅野 敏久（広島大学）

パネリスト：藤田 知丈（㈱キタイ設計），深尾 甚一郎（近江八幡市），上田 洋平（滋賀県立大学大学院），古川 彰（関西学院大学）

17:40 解 散（専用バスでJR 堅田駅へ）

(3) 自由報告タイトル

【A. 技術】 司会：細川 弘明（京都精華大学）

1. 砂漠に木を植えた結果—外来種による植林の功罪— 高津 佳史（特定非営利活動法人サヘルの森）
2. ごみのサーマルリサイクルの問題点 千葉 尚道（生活環境科学研究センター）
3. ダイオキシン論争の社会的解明 定松 淳（東京大学社会学研究室博士課程）

【B. 運動】 司会：西城戸 誠（京都教育大学）

1. 環境住民運動と労働者運動の離接関係—タイ国における工業団地開発の事例から— 青木 章之介（明治学院大学・和洋女子大学非常勤講師）
2. 市民参加型環境政策形成におけるコーディネーターとしての環境NPO—京都府城陽市の事例から— 平岡 俊一（立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程）
3. 『地元住民』の運動フレーミングの受容—抗議運動における運動イメージの形成と変遷— 青木 聡子（東北大学大学院文学研究科）

【C. 意識，教育】 司会：鬼頭 秀一（恵泉女学園大学）

1. マレーシアの環境政策への提言—マレーシアにおける大学生の環境意識調査から— 李 継堯（高崎経済大学大学院）
2. 学生達はいかにして二酸化炭素地中貯留技術に向き合うようになったか 宇野 元雄（(財)地球環境産業技術研究機構）+ 森 やす子（情報環境デザイン（株））
3. 「持続可能な開発のための教育（ESD）」の環境社会学 新田 和宏（近畿大学／生物理工学部／講師）
4. 地域再生事業における演劇的視座の有効性（試論） 村上 悟（琵琶湖ラムサール研究会）

5 - 2. シンポジウムの報告

シンポジウム「自然再生というシナリオ」を終えて

牧野 厚史（滋賀県立琵琶湖博物館）

1990年代に入って、日本では開発と自然保護についての政策が大きく変わりはじめている。1995年に政府は「生物多様性国家戦略」を策定、2002年には議員立法である「自然再生推進法」が施行された。琵琶湖のまわりでも、湖岸域を中心に様々な再生事業が始まっている。この開発と保護についての政策変化に対し、社会の側から自然との関わりを考えてきた環境社会学はどのような役割をはたしうるだろうか。今回のセミナーでは、法案作成に携わった亀澤怜治さん（環境省自然環境局）をはじめ、地元からは北村勇さん（守山漁業協同組合）、倉橋義廣さん（早崎ビオトープネットワークキング）、また専門家として池田啓さん（兵庫県立大学自然・環境科学研究所・兵庫県立コウノトリの郷公園）、鬼頭秀一さん（恵泉女子大学）をパネラーとしてお招きし、自然再生の動向と環境社会学の役割について多様な角度から検討する機会をもつことができた。以下はそのまとめである。ただ、まとめの文責はシンポジウム企画者である牧野にあることをお断りしておきたい。

1, 断片化する生活世界・技術化される生活知

「一般論では仕方ない」という鬼頭秀一さんのアドバイスを受け、政府の政策や理念の検討ではなく、現場での人々の生活から検討課題を設定することにした。5月の事前研究会を現地でもったのも、そのような方針にそったものである。幸いにも、環境省の亀澤さんを含めたパネラーの方々、ことに守山漁協と早崎ビオトープネットワークキングの方々には主旨を理解してくださり、再生事業の現場で率直な意見を交換することができた。その結果、私たちが設定したのは「自然再生の担い手とは誰か」であり、もうひとつは「再生によって実現される自然とは何か」という課題である。

琵琶湖地域の場合、自然を利用してきた住民（農民、漁民）が再生の担い手であると言い切ってよいように思う。だが、実際の担い手は単純ではない。その背景には、近代化政策による農業・漁業の変貌と、変貌に伴う生活世界の断片化がある。従来の農業や漁業、政策を肯定するだけでは、再生が必要となってきた理由を把握できなくなる。かといって、新たに登場したNPOや市民が農民や漁民の伝統的な生態学的知識に学び担い手となっていくというシナリオにも疑問が湧く。生活世界の断片化を放置したまま、技術として役立つ部分を生活知から選んで再生に活用することは、長期的にみとときはたして可能なことだろうか。具体的にいえば、生活上の実践としての農業や漁業に立ち直りへの方針が出せないまま、生態系としての自然再生のみが語られることへの疑問である。

2, 再生すべき自然とその担い手

シンポジウムでは、まず、法案作成にかかわった環境省の亀澤さんに自然再生推進法の意図と現状の評価を説明していただいた。報告では「失われた自然を積極的に取り戻すことを通じて生態系の健全性を回復する」という意図と事業についての三つの特徴が説明された。まず第1に、この法が再生の方向や枠組み、手順を定めるものであるということ。第2に、予算措置を伴う事業法でないこと。そして第3に、地域の自主性による、ボトムアップな仕組みづくりの重視である。その上で、「自然」再生は「地域」再生であると亀澤さんは結んだ。このように、ボトムアップな仕組みということが、目標の実現手段としてだけでなく、政策の正統性を支える根拠の1つとしても主張されていることに注目しておきたい。

これに対して、守山漁協の北村さんと干拓地農地の内湖化事業に直面している倉橋さんの報告は、地元のいわばボトムアップな仕組みづくりと関わる。お二人の報告には、担い手の在り方や判断の根拠など幾つかの共通点があった。第1に、まず自然の再生ありきではなく、住民（農民や漁民）のよりよい生活への模索に事業を活かそうとしていることである。魚類の産卵場所が欲しいという守山漁協はもちろん、早崎の場合にも干拓地農地の内湖化が住民の生活維持にとって望ましいという判断がある。第2に、住民にとっては、自然に働きかけた過去の体験が発言力を支える社会的基盤とみなされていることである。再生の現場では、住民の体験は単なる個人的な記憶ではない。データがない特定地域の過去の自然を回復しようとするかぎり、専門的な知識をもつ行政担当者や研究者といえども住民の体験に頼らざるを得ないのである。このような体験の評価は、生活知と科学知の従来の関係をかえる可能性がある。第3に、再生事業をきっかけに、従来の生活世界をつ

くりなおす動きが地元でみられることである。ビオトープやヨシ帯づくりなど小規模な再生事業であったとしても、それらを生活にいかすためには、農民と漁民、あるいは農家と非農家のような、地元の従来の社会関係をくみなおすことが必要となってくるようだ。

3, 生態学などの専門家の役割と地域の自律性

地元からの報告をうけ、実現すべき自然という目標選択にポイントをおいて、池田さんが生態学の役割を報告され、続いて、自然とむきあう社会システム(担い手)のあり方に関心をおきつつ、鬼頭さんが環境社会学の役割を報告された。それらは再生すべき自然の決め方、さらに専門家の役割とは何かを論点としており、地元からの報告ともかかわるものだった。

池田さんは、コウノトリの郷公園(豊岡市)での野生復帰の実践をふまえ、生態学の研究成果は再生の目標を考える上でそれなりの有用性があるが、具体的な目標の設定では限界もあることを指摘された。たとえば、昭和35年の状態という概念的な目標を想定したとしても、データがなければ、個別データを積み上げ具体的な目標を示すことは生態学には難しい。別の角度から言えば、再生の目標選択という問題は、生態学など特定領域の専門家の判断だけに頼ることはできないということになるだろう。さらに、池田さんは、行政や住民が関心をもつ「どこに何をつくればよいか」という点は、「やってみなければわからない」と指摘された。生活の場所での鳥類の野生復帰は、豊岡という地域社会のマネジメントにもつながる問題なのである。それは、自然再生が、地域社会としての判断の自律性、すなわちその地域社会にふさわしく自然を決定する環境自治という問題に帰着することを示唆している。

4, 社会システムの順応的管理

では、私たちは再生すべき自然を地域でどのように決定していけばよいだろうか。鬼頭さんは、再生の現場における正統性根拠(公共性)とは何かという問いから、決定を支える社会システムの在り方に迫る。再生の正統性には「地域再生としての自然再生」と「自然再生としての地域再生」という二つの立場がある。だが、「誰のための自然か」、あるいは「誰が主体か」という問題にそれぞれ直面し、地域での決定はゆれ動く。このような動的な意思決定の在り方(正統性の組み立て方)を評価するには、順応的管理という発想が社会システムに求められると鬼頭さんは指摘する。不確実性を組み込んだ順応的管理という考え方は、野生生物や生態系の保護管理に用いられてきたが、自然と向き合う社会システムにもこの考え方が必要だということである。鬼頭さんは、霞ヶ浦などの具体的な事例を示しながら、環境社会学研究の課題を4点に整理された。①再生の「理念」という問題に環境社会学はどのように関与するか、②地域再生に関わるマイノリティの権利問題(広義の「環境正義」の問題)、③行政に対し、市民、NPOなどの担い手を一枚岩と見なす、単線的な協働論からの脱却、④「時間」軸を組み込んだ「問題」解析と「解決」可能性の探求という4点の課題である。それらは今のところいずれも容易に方向や結論がだせない課題である。環境社会学は、地域の人々の願いやとまどい、試行錯誤の過程によりそいながら、答えをみつけていくことが必要になるだろう。そこに、生態学をはじめ、他の環境科学と実りある対話を行う可能性がみえてくるのではないだろうか。

このように、内容豊かなシンポジウムであったが、運営には課題も残された。今回のセミナーでは、二日目午後に予定された二つのシンポジウムを並行して行うのではなく、同じ部屋で連続して行うことにした。セミナーの出席者全員がそれぞれのシンポジウムに参加できるよう配慮したためである。その結果、それぞれのシンポジウムの時間が短くなり、討論の時間が十分に確保できなかった。「自然の再生」でいえば、田中滋さんの質問は再生の正統性を考える上で重要な論点を含むものだったけれども、討論時間が少なく十分深められなかったことをお詫びしておく。時間的制約と出席者への参加機会保障とのジレンマは、主催者にとっては悩ましい問題である。セミナーに参加された皆さんの評価を受けながら、さらに洗練された有意義なシンポジウムが今後の環境社会学セミナーで行われることを願っている。

シンポジウムAで、自然再生は地域の再生、地域の再生としての自然再生というキーワードが示された。それを引き継いだ議論をするか、それとも当初のシナリオ通りにするのか悩みどころであったが、セミナーも最後にきてフロアに疲れが見えており、議論よりも各報告をじっくり聞いてもらうことにした。しかし、報告に時間をかけすぎてパネラー間の討論を省かざるをえなくなってしまう。司会者として反省している。それでも報告が興味深かったことや報告者のキャラクターに支えられ、緊張感が解きほぐされる2時間であった。

報告は4名によりなされた。いずれも琵琶湖周辺で実際に行われている話である。

まず、近江八幡市の深尾氏より、人口430人の沖島の活性化プラン（平成15年度）について報告があった。ここでは本格的なKJ法を用いてプランを作成したことに特徴がある。島民全員の意見を取り入れて現状を把握し、それに基づいた地域づくりの方向や必要なことの提案をまとめた。これを受けて、渡船の夜間延長やバス路線の変更、島内の散策路の整備など、生活者の目線に沿った活動が始まっている。また、この過程で、市職員である深尾氏が地域に受け入れられていく実感について自身の体験を述べられ、同じ市内のことではあるが、地区住民と外部者（この場合は行政職員）との関わりを考える参考になった。

ところで、ワークショップなどでKJ法を模した試みに触れる機会はしばしばあるが、本家のKJ法を適応した事例報告を聞く機会は少ない。KJ法に限らず、方法論に関する研究会員などにより積極的に取り組まれてよい。

次に滋賀県立大院生の上田氏より、自ら開発した「心象図法」の実践報告がなされた。当日参加された方には彼の話はとても印象に残ったと思うが、これを簡単に説明するのは難しい。絵を見て話を聞いてはじめて、すごさを感じることができる。自ら書いた紹介文では、人々の五感による感覚体験のデータと、それにもとづく聞き取りなどによって住民と地域の自然環境との関わりのある方を、住民との協働により一枚の絵図に表現し、それをさらに活用していく方法ということになる。絵図に表現することでフィールドワークの成果を生かす新たな可能性を示している。絵が出来たら終わりではなく、その絵が触媒となって新たな語り仕掛け人の手を離れて地域の中に生まれていく様は、研究者が研究成果を地域に還元する仕方についても考えさせられた。ただこの手法は、上田氏のキャラクターと不可分なところがあり、説明のしにくさが難点でもある。

これが徹底して住民の記憶や体験にこだわって地域像を描くことだとすると、藤田報告のエコ村の試みはその対極にある地域づくりのシナリオといえる。エコ村は、行政、企業、研究者、市民が協働してエコロジカルなコミュニティを建設しようとする構想で、現在近江八幡市内に15haの建設予定地がある。エコ村にはさまざまな主体が関わっているが、藤田氏は、エコ村に住んでみたいという市民の立場から議論がなされている生活者ワークショップのファシリテーターである。報告では、洗濯という行為のあり方や、個人の自由と共同性のバランスのとり方などをめぐってメンバー間の意見が割れることや、やりたいことの前に法制度の壁が現れることなど、ワークショップの具体的な話題を紹介いただいた。エコロジーという思いに集まった人たちがいかに未来へのシナリオを描くのか、さらにはそれをどうすれば現実の地域に植え込めるのかなど、考えさせられる点が多い。

最後に古川氏が補足とまとめを行った。まず、マキノ町知内地区で2百数十年絶えることなく書き続けられてきた村の日記の一端を示し、村の「あまりに日常的な」仕事は今後どうなるのか、シナリオを問う際にどう扱うべきかという問題提起がなされた。その上で全体的なコメントが述べられ、住民がひきずっている歴史性の問題、住民の中にある記憶の発掘、エコ村のような「思い」に集まった人が描く未来絵図、それぞれから想起されるシナリオには接点を認めにくい、どうすればつなげられるのだろうかと問われた。これはつまるところ合意形成の問題であり、合意形成のあり方そのものが問われていると考えるならば、各報告はそれを考えるヒントを提供しているとまとめられた。

報告された各事例は、地理的に近いところで行われている。それなのに地域のシナリオを描くのに、かなり異なる方策が採られている。そのことにとっても関心をひかれるとともに、地域のシナリオを考える上での課題が多く示されたと思う。誰が、誰のシナリオを、どのようにつくっていくのか、その答えは容易には見つからない。この問いに関して、各事例がそれぞれ異なる設定になっているのが、今回の面白いところであり、逆に個々の関連がみえにくいところであった。

5-3. 自由報告

自由報告Aセッション【技術】

細川 弘明（京都精華大学）

報告 A1, 高津佳史「砂漠に木を植えた結果——外来種による植林の功罪」では、NPO「サヘルの森」が16年にわたり取り組んできた西アフリカ、マリ共和国の早魃地域での植林活動の経緯が紹介された。樹種として利用した南米原産の移入種プロソピス（有刺樹木）の過剰な繁茂により、住民の通行や農作業に支障がでたり、さらにはマラリアやリーシュマニア症など昆虫媒介疾患の増加という予期していなかった弊害が生じていることが報告された。問題となったプロソピス林の拡大（天然更新）は、内戦激化による管理中断・無人地帯化という要因によるところが大きく、それを「外来種による植林の功罪」という一般論にそのまま結びつけてよい事例といえるかどうか、やや疑問が残った。無人化せず管理が続いていれば、たとえば、アカシア在来種（エジプト・ミモザだろうか？）の定着率なども変わっていたのではないかと。むしろ、今後の計画伐採や炭焼き利用のプログラムにどのように住民参加をえて事態を変えていけるか、そこにこそ「植林 NGO」としての長期的関わりの強みが発揮されるのではないかと思われる。現地の農民と牧畜民の関係、階級社会における住民参加のあり方、行政と地域住民の関係、といった側面への言及がもう少し欲しかった。

報告 A2, 千葉尚道「ごみのサーマルリサイクルの問題点——ごみ固形燃料（RDF）の理想と現実のギャップ」では、RDF 使用の現場での数々の深刻な問題が具体的に解説され、「サーマルリサイクルの幻想」からの早急な脱却の必要性が訴えられた。指摘された問題点（水分量制御の困難、発酵による可燃ガスの発生、運転コストの高さ、熱効率の悪さ、ダイオキシン総排出量の増大、塩化水素ガスによる腐食など）は、いずれも技術者には最初から分かっていた事柄が多いと思われるだけに、プラントメーカーの技術者だった方がこのような発表をおこなうことに、いささか鼻白む思いがしたのは私だけだろうか。千葉はゴミの素材に応じた処理の違いをよりシステム化する方向性（たとえば生ゴミはサーマルリサイクルにはまわさないという原則、サーマルよりマテリアルリサイクルを優先するという原則）を示し、それはもちろん妥当な主張だと思われるが、「ごみ処理広域化」という政策自体に焦点をあわせた批判や代替提言と組み合わせないと空しい。

報告 A3, 定松淳「ダイオキシン論争の社会学的解明」は、中西準子の環境リスク論について、中西の社会的発言に対する批判（分析 I）と中西理論そのものへの批判（分析 II）をこころみ、環境リスク論のもと「官僚批判」としての有効性を評価しつつも、政策の妥当性を評価するという次元ではリスク論以前に解決すべき問題が多いことを指摘した。司会者としての印象だが、定松は、いわゆるダイオキシン対策バッシング（「騒ぎ過ぎ」との非難）を構成する数多くの次元に言及しすぎたため、中心的な論点である中西理論に対する＜内在的批判＞（とりわけ、リスクの連動性の検証、受益者と受苦者の不一致の問題）についての説明がおろそかになってしまった。そのせいで、かなり損をしたように思われる（聴衆からはかなり不評であった）。リスク比較をめぐる社会的合意の条件という視点は、技術と社会の関係において極めて重要なポイントであるだけに悔やまれる。

最後に、総合討論を約 40 分にわたりおこなった。全体として「原論の欠如」が複数の参会者から指摘された。つまり、環境社会学が技術論といかに関わるか、あるいは、人間がいかに技術にかかわるかについて環境社会学はどのような評価の視座を提供するのか、といった点での展望が欠如している（ないしは具体性を欠いている）との指摘である。谷口吉光は、環境社会学の貢献が可能な分野として、(1) 失敗事例の詳細な分析、(2) 技術評価をめぐる合意形成過程に対する社会学的評価、あるいは一歩ふみこんでプロセス・マネージメント、(3) ウォッチドッグの役割（技術動向を社会学的な視点で監視する）の 3つを挙げた。朝井志歩は、技術が失敗したときに失敗の負担を誰がおわされているかという視点が重要だと指摘した。嘉田由紀子は、全体セッションでの「もっとケンカをしよう」という鳥越皓之の呼びかけを引用しつつ、合意形成をめぐる社会組織論を技術論とからめていく可能性を示唆した。

【文中敬称略にて失礼しました。】

このセッションでは、「運動」というテーマで3つの報告がなされた。

第一報告では、青木章之介氏（明治学院大学・和洋女子大学非常勤講師）が、タイにおける日本の開発援助が関係するさまざまな環境問題の事例を紹介する一方、タイの労働運動と環境運動の比較を行い、現時点では地域の労働運動が環境住民運動とのリンケージが困難であるという報告がなされた。タイにおける環境問題の被害状況の実態、社会的地位別の労働者の類型と労働運動との関係、労働運動と環境運動が関連していない（離接関係）という事実は詳細な報告から理解が得られた。しかし、それがどのような理論的、実証的含意を持つのかという点については不明瞭であった。フロアーからの質問がしづらかった理由も、このあたりの事が関係しているかと思われる。管見によれば、報告者の関心は、環境住民運動を媒介することによって地域の労働運動が発展するのかという実践的な関心があったと思われる。報告の通り、労働運動と環境住民運動が「離接」関係であるならば、なぜ「離接」であり、どのようにしたらそれが解消されるのかといった点について言及すべきであろう。もしそれができないのであれば、タイの労働運動や環境問題に関する詳細な調査を活かすような「問い」の再構成が必要になるのではないだろうか。

第二報告は、平岡俊一氏（立命館大学大学院）が、京都府城陽市の環境基本条例と環境基本計画を策定した事例を対象に、市民参加型の環境政策形成における環境NPOの役割に関する報告がなされた。具体的には、基本的には市民側に立脚しながら、異なる主体間による協働作業を円滑化するための支援、「専門知識と政策の翻訳」などのコーディネート機能を担う「中間支援組織」として環境NPOが重要であるという指摘があった。

フロアーからの質問は、事例として紹介された環境NPOとコンサルタントとの違いを強調する報告に対して、「なぜ城陽市がコンサルタントではなく環境NPOに委託をしたのか」、「環境NPOが第三者的な独立性をどのように担保できるのか、その条件はどこにあるのか」、「収入が少ないNPOが行政委託を受けることで行政の下請けになってしまうのではないか」、「業務委託の内容がコーディネート機能を本当に求めているのか、NPOは現実の多くの場面では対等ではないことが多い」など、環境NPOの対等性、独立性をどのように担保できるのかといった質問が数多く投げかけられた。さらに城陽市の環境基本条例における「環境権」に関する質問がなされた。

報告者が当該の環境NPOに関与されているためかどうかは定かではないが、「コーディネート機能を担う主体として環境NPOが重要である」という前提ありきの議論だったように思える。例えば、環境基本条例を策定しようとしている他の自治体の事例との比較、コンサルタントと環境NPOの比較、コーディネート機能を担う他のイシューにおけるNPOとの比較などを行うことによって始めて、環境NPOの役割について議論できるのではないだろうか。また、フロアーからも指摘があったように、参加者とコーディネーターの役割を固定的に考えるのではなく、環境NPOにおけるコーディネーターの役割の内容、参加者との関わり方についてどのようにすればよいのかという「問い」（実はこの問い自体は報告レジュメの最後に記述されている）が必要であろう。

第三報告は、青木聡子氏（東北大学大学院）が、ドイツ・ヴァッカーズドルフにおける使用済み核燃料再処理施設の建設を巡った反対運動（BIS）が成長した社会的条件の導出を目指すという問題関心のもと、運動の担い手団体のフレーミング戦略が地元住民の動員に対してどの程度有効であったか、反対運動の「地元」での支持層の形成過程はどのようなものであったのかという点を、地方紙投書欄における住民の意見をデータとした分析が行われた。分析の結果、BISの「地元」に根ざした「穏健な運動」という運動フレームは、運動初期には地元住民の「集合的記憶」やキリスト教徒としての「集合的アイデンティティ」に後押しされながら、オーバーパフォームに愛着を持つ住民の心をとらえることに成功した。しかし、運動が激化し「暴力性」が問題となった際にBISの用いたロジックは、必ずしも地元住民に受け入れられたわけではなく、むしろ、住民は別のロジックを用いて「穏健な運動」というイメージを保ったことが指摘された。

議論になった点は、分析の中心であった、運動フレームの「受け手」である住民の公論形成に関するものであった。例えば、「世論調査の変化を表すデータがあるのか」、「地方紙の投書欄が公論形成に積極的に機能を果たすが、学習会など他の要因はなかったのか」、「計画推進側のカウンターフレームの影響はなかったのか」、「投書欄データから、住民の意識の量的、質的変化は確認できたのか」などの質問があり、また、「投書欄が公論形成の一部として使われているという点を強調した方が、報告の論旨が明確になったのではないか」とい

たコメントも寄せられた。データの制約がある中で、フレームの「受け手」である住民の意識の動態を把握し、BISという運動団体が成長した社会的条件を析出した分析は、明晰であったと思われる。フロアーからのコメントにあったように、問題における要因連関の把握の仕方を広い文脈で捉えらるとともに、世論の形成がどのようなメカニズムを経て行政への決定に影響を与えたのかなど運動の生起にとどまらない幅広い議論を展開することを期待したい。

総合討論は司会の不手際で十分な時間がとれなかったが、社会運動、NPOという対象を捉える上で、こうした主体が活躍する社会的、歴史的な文脈、問題状況を踏まえることが重要であり、また問題解決志向を持つ環境社会学としては、環境問題を解決する主体である社会運動、NPOがどのような場合に成功するのかという点について、経験的かつ理論的に分析を行う必要があることが指摘された。理論と実証との往復作業が重要であるという主張は月並みであるが、困難な作業でもある。環境問題やそれに関わる運動の報告だけではその対象に関心がある者のみしか興味を喚起しない。社会運動やNPOに関する過度の一般化は無味乾燥すぎる。何が理論的にも実証的にも有意義な「問い」になるのか悩みが尽きないが、それは実践的な問いを突きつけられる社会運動研究や環境社会学の宿命でもある。こうした悩みを常に念頭に置きながら、研究を続けていくことが重要であると感じた。最後に本セッションを盛り上げてくださった報告者ならびにフロアーの方々に御礼申し上げます。

自由報告Cセッション【意識・教育】

鬼頭 秀一(恵泉女学園大学)

C会場は、内容的に特にセッションとしてまとめられるものではないので、各報告に関してそれぞれ内容や議論について報告しておきたい。

第一報告(李継堯「マレーシアの環境政策への提言」)は、マレーシアの大学生への環境意識調査を中核にしているにもかかわらず、アンケート調査に関する基本的な部分が押さえられていなかった。月並みでステレオタイプな結論を導き出している推論過程自体も不明確でその点も問題なのだが、それ以前の問題として、調査の設計の仕方、研究の方法論のあり方自体に根本的な問題があった。結果的に、この報告の質疑応答は、サンプリングの仕方から始まりアンケート調査の調査法等について、報告者の今後の研究に向けて、フロアの側が「ていねいな研究指導」を行なうことになってしまった。学部の段階で本来なされていなければならないような基本的な指導が大学院生になされていないどころか、指摘さえされずに学会報告に送り込まれているこの事実は、今の日本の大学院教育に恐ろしい事態が進行しつつあることを伺わせる。

第二報告(宇野元雄・森やす子「学生達はいかにして二酸化炭素地中貯留技術に向き合うようになったか」)は、C会場の報告の中で、唯一、聴衆も安心して聴き、議論ができるレベルの報告であった。この研究は、地球温暖化対策として国家的に進められている二酸化炭素地中貯留技術に関して、その技術が実際に適用される場所の近隣の住民を中心として、広く日本国民がこの技術に対してどのような対応を取り、また、受容されるべきかという問題に関する大きな研究の中で行なわれており、そのこと自体、環境社会学として取り組むべき重要なテーマであると思われる。今回の報告は、最終的にこの技術の受容にかかわる合意形成の手法の開発の予備的な研究として、ある大学の環境社会学の受講学生に対して行なわれたという位置づけであるから、報告のタイトルとの間で多少の違和感があった。とはいえ、報告自体は、アンケート調査に加えて、量的な調査では不十分な問題に関しても、フォーカス・グループ・インタビューを併用して、全体的にも興味深く、説得力のある議論がなされていたと思われ、活発な議論が行なわれた。しかし、一方で、報告者は必ずしもそのことを意図していないにしても、今回の研究は、多様な価値観を持つ地域住民や一般市民をどのような形で「合意形成」に持ち込むことができるかという社会的な手法の確立という研究の方向も示唆できることから、「合意形成」はそもそもどうあるべきなのかということを、環境社会学の政策的課題とともに、改めて問題提起をされたように思われた。

第三報告(新田和宏「持続可能な開発のための教育の10年(DES D)」の環境社会学)は、DES Dという、近年大きく展開しており、さまざまな意味でその運動自体の分析と、その社会的意味の分析が待たれている、環境教育の一つの運動の流れを主題としており、大変期待をもって受けとめられた。しかし、残念なことに、「環境社会学」とは銘打たれているものの、「環境社会学的分析」とはほど遠い報告であった。報告の大部分は、DES Dの概要にあてられ、「ヒアリング」というものの、その運動を担っている人たちの出自や問題関心、そ

の周辺に位置づけられる広い意味での環境教育全般の担い手の人たちや、「環境教育」の全体像の社会科学的な分析もなく、DESDのある意味で「公式的な」問題分析、その課題と展望の説明に終始した。質疑応答の中でも、その種の疑問には十分に答えられていなかった。DESDの中では、「持続可能な社会形成を担うべき市民の能力開発、エンパワーメント、主体形成」などが、そのこと自体問題にされることなく語られているが、さまざまな地域のさまざまな形の環境教育的実践との関係を整理するためにも、そのこと自体の社会的分析こそが必要なのではないだろうか。いったい「環境社会学」とは何だったろうかという疑問を感じざるをえなかった。

第四報告（村上悟「地域再生事業における演劇的視座の有効性（試論）」）は、地域再生や地域づくりなど、この種の問題に対して、「演劇」や「物語」という新たな概念を持ち込んで分析することが、新たな視点の導入になるのか期待を持たれていた。しかし、そのアイデアの可能性は感じつつも、概念装置の理論的検討やその実証的分析の点から、現段階ではまだ十分に説得的な議論にはなっていないことが明らかになった。特に「演劇」に関しては議論が集中し、演劇の世界の中でもさまざまな演劇のスタイルがある中で、この用語自体がかえって誤解を生み、多義的なものにならざるをえないことが判明した。また、「演劇」や「劇場」というものを、より原理的に捉える視座もあり得たが、報告者が、要旨にあった「物語」を「シナリオ」に変更してしまったことから、逆説的にその種の議論から遠くなってしまったようにも思われた。ただし、地域再生や地域づくりの議論の中で、構成員のそれぞれの主体のあり方と、地域全体の記憶や未来のあり方など「時間」をめぐる問題は、環境社会学の中でも今後大いに議論し展開していくべき課題であり、報告者の「演劇」や「物語」という概念に込められた思いは十分にくみ取られなければならないし、報告者の今後の研究に期待したいところである。

この会場の報告を全体としてみても、環境社会学の現在の到達点を踏まえつつ、その中で自分の報告がどのような意味を提起しているのかということに関して、やはり全般的に希薄だったといわざるを得ない。また、近年は少なくなってきたものの、学会の自由報告として耐えられないものに関しては、会場の余裕があっても、事前に積極的な選抜をかけるべきではないかという必要を、このC会場では強く感じた。

5-4. 特別インタビュー

特別インタビューの唆と可能性 船橋 晴俊（法政大学）

今回のセミナーでは、「特別インタビュー」という新しい形式で、「琵琶湖」というシナリオの来し方行く末」を考える企画がたてられた。予定された話し手は、元滋賀県知事の武村正義氏、琵琶湖研究所初代所長の吉良竜夫氏、琵琶湖をフィールドとして生活環境主義を提唱してきた鳥越皓之氏の3人。特別インタビューに先立って、嘉田由紀子氏より「琵琶湖をめぐる政策・環境史」のタイトルのもと、明治期以降の琵琶湖をめぐる問題状況と中心的政策課題の変遷の概略が説明され、現在の「琵琶湖総合保全」政策が打ち出される歴史的経緯についての展望が提示された。残念なことに、高齢の武村正義氏（元滋賀県知事）が体調不良のため、直前になって参加取りやめとなった。けれども、武村氏の部下の立場で琵琶湖研究所の設立と運営に取り組みされてきた嘉田氏に、急遽その空白を埋める形で、1970年代における武村県政の登場の背景と経緯、武村氏の個人的人柄、武村県政における琵琶湖への取り組みについて、いくつかのエピソードを織り交ぜながら説明をいただいた。次に、吉良氏より、生態学者としての歩みの中での滋賀県や琵琶湖との関わり、琵琶湖研究所の設立時の考え方、運営実績についての評価、生態学についての考え方、環境社会学への期待などについて語っていただいた。最後に、鳥越氏には、琵琶湖との関わりの中から、生活環境主義という固有の考え方を生み出してきた内面的模索の過程を語っていただいた。

この特別インタビューを通して、実に多様な論点が提示された。ここでそのすべてを紹介することはできないが、特に印象的だった論点を示してみよう。第1に、フィールドの重要性。吉良氏の生態学も、鳥越氏的生活環境主義も、フィールドとの深い交流から可能になったものである。当初、鳥越氏は環境社会学者としてフィールドに入ったわけではなかった。「現場で頭をなぐられるような衝撃を受け」、それを説明する論理を求めてたどりついたのが生活論、経験論であった。つまり、先行諸理論のさまざまな発想の中から、何を拒否し何を継承するかの判断基準は、フィールドが提示してくれたのだった。そこから紡ぎ出されたのが、生活環境

主義であったのである。第2に、琵琶湖をめぐる社会的なまなざしが、一面的見方から多面的・総合的見方へ進展してきたこと。琵琶湖をめぐるシナリオの変遷の中に総合的視点への道が浮き彫りにされている。総合保全政策が目指されている今こそ、環境社会学が落ち着いてその持ち味を発揮できる時であろう。第3に、生活知と科学知の関係。総合保全政策の背景には、生活知と科学知の相互作用、そして、生活者と科学者の相互作用が存在する。科学知の一面性に対して、生活知は現場の具体性・複雑性に立脚する批判性を持ち、認識の総合性への接近に貢献しうる。環境社会学の一つの役割は、「生活知の拡声器」となって、認識の総合性に貢献し、さらに政策形成過程に介入することであろう。

全体として、今回の特別インタビューという方式は、通常の論文やシンポジウムでは、表面に出てこない論点を発掘するのに、きわめて効果的であることが示され、企画として成果をあげたと言えよう。面白い特別インタビューを可能とする条件についても、示唆が得られた。第1に、インタビューの聞き手と話し手、さらに、聴衆の間に、基本的事実についての一定の認識の共有があることが望ましい。今回は、事前にエクスカッションが用意され、さらに、特別インタビューの機会にも資料配付がなされたことがあり、そのような条件が充たされていた。今後も、同様の企画の際には、年表などの用意により、基本的事実認識の共有という前提が必要である。第2に、話し手に人を得ること、第3に、聞き手に人を得ることが、成功の条件であろう。話し手が、問題の渦中で長年にわたり奮闘した人であり、当該問題の裏表を熟知している人であること。そのような人によって、表面的報道や公式の論文には必ずしも表明されていないような、しかし非常に重要な論点が、率直に表出されることが、特別インタビューの醍醐味である。そのためには、聞き手が相当に事前の準備を整え、核心をついた質問をすることが必要となる。幸いにも今回の特別インタビューにおいては、聞き手（脇田健一、野田浩資、近藤隆二郎の各氏）の率直な問いかけが、話し手の意見を深いところから引き出すことに成功したように思われる。

5 - 5. 参加者の感想

琵琶湖との「遭遇」

富田 涼都（東京大学大学院）

自分自身、霞ヶ浦という湖を研究フィールドとしておきながら、琵琶湖を訪れるのは2度目であった。それも、琵琶湖に直接ふれるのはほとんど「はじめて」と言っても過言ではない。数年前、はじめて霞ヶ浦の湖岸に立ったときは、延々とつづく広い湖を前に言葉を失った。まさに茫漠としか言いようがなかったのを未だに覚えている。今度は琵琶湖だ。霞ヶ浦よりも広い湖である。

そんなこんなで、琵琶湖に行く事は、まさに「未知との遭遇」に近いものがあった。しかし、振り返ってみれば、数年前のように茫漠さに圧倒されたわけではない。琵琶湖でのさまざまな「遭遇」は、自分が今かかわっている霞ヶ浦という湖との往復でもって自分に語りかけてくるものだったからだ。

プロローグは琵琶湖博物館ではじまる。実は、このセミナーの集合時刻前に琵琶湖博物館を訪れていた。個人的に博物館の類が好きな自分は、ぜひウワサの琵琶湖博物館をみておきたかったのだ。…この感想を一言で言えといわれれば、「参った」としか言いようがない。もちろん、個々の展示の工夫もすばらしいが、なによりも、モノの展示を飛び越えた、たとえようのない迫力に押されたという感触が「凄かった」のだ。結局、霞ヶ浦と比べながら考えていたり、「富江家」にハマりこんでいたりしたせいか、6時間近くかけても回りきれず、時間に追い出されるようにして博物館を後にした。

こうして、自分の琵琶湖のセミナーは始まった。楽しみにしていたエリ漁体験のエクスカッションが強風で中止になってしまった（こればかりはどうにもならない）が、守山漁協で目撃したブルーギルの「水揚げ」は、いつもより少ないとはいえ十分に衝撃的だったし、その後のおいしい試食会や北村さんのお話も聞く事ができた。また、特別インタビューでは、武村さんが急遽来れなくなるという残念なアクシデントがあったが、1970～80年代の「転換期」に立ち会った方々の話を聞く事ができた。物心がついて、社会の出来事についてリアルタイムで経験したという感触があるのがせいぜい90年代に入ってからという自分にとっては、こうした「転換点」について、実際に立ち会った方の話が聞けたのは貴重な体験であった。

そして、最終日のシンポジウム。A・Bともに自分の研究課題とだいぶ重なるところが多かったが、特に印象的だったのは上田さんの心象絵図だった。絶妙な語り口もさることながら、絵図が出来ていくまでの過程や

上田さんが地域に入って考えたりまとめたりしている姿は、「調査」と称して地域へと入っていく自分にとって、みずからを省み、考えさせられるものだった。

琵琶湖から帰りのなか、強く思ったのは、地域の力強さだった。博物館で感じた迫力も、特別インタビューでの話も、シンポジウムでの北村さん、倉橋さん、深尾さん、藤田さんといった事例の興味深さも、きつこうした力の為せるものだろう。そこには地域で生きるひとびとの、なみなみならぬ「思い」が下地になっているに違いない。そして、そのことに気づく事で、文献や資料の描く世界でしか知らなかった琵琶湖が、また違った世界として見えてきたのは大きな収穫だった。

それと同時に、霞ヶ浦においても同じような事がいえるのではないかという思いも新たにした。琵琶湖との「遭遇」は自分がこれまで知っているものとは違う世界の存在を示唆するものだった。このことは、自分にとっての今後の課題でもあるが、まさにこのセミナーは、こうした新たな「遭遇」への期待を与えてくれるものだった。最後に、セミナー事務局をはじめ、琵琶湖の方々には、こうした「遭遇」を与えてくださったことに、心からお礼申し上げたい。

琵琶湖セミナー印象記 平川全機（北海道大学大学院）

2004年春のセミナーは、琵琶湖岸の守山市で開かれた。春のセミナーとは言っても、6月下旬の本州である。北海道から参加する身にとっては、たいそう蒸し暑く、それだけでバテ気味であったことをお許し願いたい。しかし、一昨年の水俣セミナーに続き、疲れを吹き飛ばすだけ内容が充実していたように思う。充実したエクスカッション、湖魚料理もでた懇親会、特別インタビュー、自由報告、シンポジウムと内容の濃い2日間であった。

土曜日はエクスカッションから始まった。私が参加したのは、「沖島の暮らしとこれから」である。船で沖島に渡り、昼には湖魚料理を堪能した。ひそかに一番良い思いをしたのではないかと考えている。午後は、特別インタビューであった。武村正義氏が参加されなかったのは残念であった。登壇の各氏による話は、当時の時代状況や研究者の思いが伝わってきた。一方で、提唱から20年あまりが経つ生活環境主義を聞き手に今一度考える機会を与えたように思う。

翌日は、自由報告である。新鮮な議論を期待する分、他の企画と比べると心持ち物足りなさを感じてしまった。それは、発表内容によるものばかりでなく、その後の議論にも原因があるのではないだろうか。たとえば、院生の発表に院生が議論を挑むようなことがあまり見られなかったように思う。このような指摘は、まさに私たち院生にかえてくることを承知してはいるが、自戒の言葉としてもあえて書き添えておきたい。

午後のシンポジウムA、「自然再生というシナリオ」は大変興味深く聞いていた。保全生態学の分野では、順応的管理やエコシステム・マネジメントという考え方の中で人・社会の側面を取り組もうとしている。しかし、私が知る範囲においては、当然のことながら生態学においては生態系保全あるいは再生が大前提となっており、そこに議論の限界があるように思う。そうしたディシプリンとは違った方向性を環境社会学がいかにか提示できるのか、今問われているように思う。関心のある分野であったため、コウノトリや琵琶湖における取り組み、鬼頭秀一氏の問題の整理と各報告は刺激的であった。試行錯誤を繰り返している現場から、私も考えていきたい。

ただ、シンポジウムBは最後まで聞くことができず残念であった。札幌へ日曜日に帰るためには、昼過ぎには出発しなければならない。毎回、最終の飛行機の時間と空港までの時間を計算することになる。私以外にも午後のシンポジウムを途中で退席する姿も数名見られたと思う。折角のシンポジウムの途中に戻らなければならないことは、私も大変残念であるし、登壇者にも申し訳ない。これは、セミナーのたびに感じたことであるが、もう少し遠方からの参加者に配慮をいただけないだろうか。今年秋のセミナーは土曜日に開催と聞いている。安心して最後まで参加することができそうである。

今回もまた知的刺激に満ちたセミナーであった。この刺激を活力に研究に励もうと心に期し、帰路についていたのであった。

エクスカージョン 1

漁師がめざす琵琶湖再生のとりくみにふれて 小野 奈々 (筑波大学大学院)

「漁師がめざす琵琶湖再生」とはどのようなものだと思いますか」と問われたら、「売れる魚が十分に獲れる湖にすることでしょう」と、疑いなく答えるだろう。当たり前といえば当たり前のことだ。だが、漁師からみれば「当たり前」のこの思いが、他の人たちにはなかなか通用しない。漁師が「琵琶湖再生」にとりくむ難しさはこの点にあるようだ。

その日は強風のため船が出なかった。エリ漁を体験するかわりに、わたしたちは地元の守山漁協に迎え入れてもらった。「今朝とれた魚をみてください」といわれて、案内されて目にしたのは、山盛りのブルーギルだった。膝丈ほどの樽にぎっしり詰められており7杯はあった。アユやワカサギなど「売れる魚」は、底浅いケースにわずか4杯だった。近年網にかかる魚はブルーギルやブラックバスばかりで、漁獲量全体の約9割を占めるという。琵琶湖特有の在来種であるモロコやニゴロブナはほとんど獲れない。琵琶湖全体の水揚げも減っているという。守山漁協が、「琵琶湖再生」を切に願う事態を目の当たりにした。

在来種が獲れなくなった原因や、漁獲高が減っている原因をはっきりとつきとめることは難しいようだ。外来魚が在来種の稚魚や卵を食べてしまうからだと考える人もいれば、開発で産卵場所になる湖岸が減ったことこそが原因だと考える人もいる。現状をどう把握するかは、漁師たちのあいだでも意見が分かれるところだろう。生活がかかっているのに、漁協内部でも意見がシビアにぶつかっているのではないだろうか。それだけでも、「漁師の立場」から「琵琶湖再生」にとりくむには困難があるだろう。

ところが、「琵琶湖再生」のために「漁師の立場」に立つ人は、予想しないところで心を砕いていた。次の日のシンポジウムで、守山漁協副組合長の北村さんがその難しさについて語っていた。在来魚が外来魚から身を隠し産卵できるように、ヨシ地帯の確保が必要だと北村さんは提案してきた。しかし行政は湖岸に公園づくりを計画したり、見栄えに配慮してヨシ地帯の面積をわずかなものにした。研究者や環境保全に興味をもつ市民活動家と北山さんとは、気を使うところや危機感がずれていた。それでも北村さんは、立場も考え方も違うこれらの人たちに妥協しつつ、「琵琶湖再生」を漁師がめざす方向にもっていこうと心を砕いてきていた。景観や生態系の保全、レジャーなど、さまざまな価値が琵琶湖に付加されるなかで、「漁師の立場」にたった「琵琶湖再生」にむかって周囲の理解をとりつけていくこと——これが、漁師が「琵琶湖再生」にとりくむ難しさであり、実際にとりくむ上でのリアリティのようだった。

「水をきれいにするのもいいけどさ、魚が獲れなきゃ」。守山漁協を見学していたときにそばに立っていたわけ知り顔のおじさんがいっていた。「やはり、漁師の方ですか」と尋ねると、帽子のロゴを指さして首を振った。見れば“JA”とある。佃煮にするジャコを買いにきただけだよ、と笑った。それからしばらくのあいだ、おじさんは漁協の人たちとときおり言葉を交わしていた。そして何をやるわけでもなく、ぼーっと琵琶湖ながめていた。

近年では、農家の協力を得て、木浜の田んぼでニゴロブナの稚魚放流をはじめたと北村さんが話していた。それは、昔ながらのあり方に環境を戻そうとするだけの取り組みとして受け取れなくもない。しかし、「琵琶湖再生」にむけて、漁師がいまなぜ協力者に農家を選び、かつての環境に戻すことをこれからの取り組みに選択するのか。その選択にはもう少し深い理由があるのではないかとも思う。漁師からみて「当たり前」の思いを、“JA”のおじさんが当たり前で代弁してくれたことを思い出し、その理由は何だろうと考えている。

エクスカージョン 2

「琵琶湖博物館の舞台裏」班 野崎賢也 (愛媛大学)

琵琶湖博物館には、(普通の)「お客さん」としてこれまで5回以上来たことがあった。おもしろくて1日では全館見終わらない、企画展もあるしまた来よう、というのを何度か繰り返している。こういうリピーターが、琵琶湖博物館には多いのではないか。京都近辺に住む知り合いの家族も、子ども連れで琵琶湖博物館を何度も訪れているらしい。実際、それだけの魅力をそなえた懐の深い博物館であると思う。夏休みなど、子どもを放り込んでおけば1日飽きずに遊んでいて(しかも勉強!になるし宿題のネタにもなる)オトナものんびりゆったりくつろげる。

他にそれほど多くの博物館を知っているわけではないが、日本各地の博物館の中で、わたしのイチオシはこの琵琶湖博物館である。

と書いたそばからだが、ここを訪れる度に、なにか引っかかるものがある、それがなんなのか、なかなか言葉にできずにいた。今回のエクスカージョンでは、この引っかかりをなんとか解明したいと密かに意気込んで、琵琶湖博物館に向かった。

われわれエクスカージョン一行を出迎えて博物館についての説明と案内をしてくれたのは、総括学芸員の布谷知夫さんだった。まず、『要覧』をもとに設立準備からこれまでの経緯を中心にお話をうかがう。その中で驚いたのは、琵琶湖博物館は当初からこのスケールで構想されていたということ。「バブル期で運がよかった」というコメントがあったが、「構想」というのは重要だ、とあらためて認識した。また、準備段階のお話を伺ったが、学芸員同士でああでもないこうでもない、というような感じで、じっくりと準備を進めていった、そのとても重要な、そして楽しかった頃？の様子が、穏やかでにこやかな布谷さんの語り口から想像できた。

その後、文字通り博物館の「舞台裏」を案内してもらおう。「水族館」のパイプが縦横に走る舞台裏をあちこちめぐり、最近の水族館というのはものすごくお金がかかってそう、ということを実感する。

帰り際に、博物館の研究調査報告 16 号『生活再現の応用展示学的研究 - 博物館のエスノグラフィーとして -』（嘉田由紀子・古川彰編）という分厚い報告書をいただいた。これをもらっただけでも価値があるなあ、と思ったが、そういえば「引っかかり」を解明するヒントがこの中にあるかもしれない、と当初の意気込みを、最後の最後で思い出すことができた。

学会が終わって、この稿を書く際に、いただいた報告書をめくりながら、琵琶湖博物館の「展示」についての私自身の「引っかかり」を再考してみた。富江家など「昭和 30 年代の生活情景再現」の展示。そのそばにいと、来館者たちの声が聞こえてくる。子どもを連れた三十代の夫婦だったか、「こんなモノを使ってたんだあ・・・」と新鮮な感嘆の声を耳にしたとき。（おいおい、それは四国の山の中で今でも普通に使ってるよ・・・）とつい、こころの中で応えてしまった。そう、琵琶湖周辺や京阪神に生まれ育った四十～三十代以下の世代にとっては、この展示はまさに「歴史」であって、はるか遠くの世界のことで、そこから先はなく、その展示で完結してしまう。逆説的だが、「展示」を見ることで（触れられる近さにあることで）、いま生きている世界から遠ざかっているのではないか。すでに完結されたとみなされているのではないか。博物館の展示を見に来る彼らが、いま現在の日本の地域社会の暮らしについてあらためて思いをめぐらすことはないだろうな、と感じた。琵琶湖博物館の展示は、非常によく考えられていて、親切である。だが、その親切さによって完結してしまう、親切さがわずかな、でもある意味で深い溝を生み出しているのかもしれない。

琵琶湖博物館は、文句なく、1990 年代の最高の博物館の一つに挙げられると思う。その基本理念の一つ、「フィールドへの誘いとなる博物館」の意味を、自分自身の「仕事」に置き換えながら考え続けていきたいと思った。

エクスカージョン 3

「水のことは漁師に聞け」 森久聡（法政大学大学院）

今回の琵琶湖守山セミナーは、環境社会学の一潮流である生活環境主義が生まれたフィールドを訪ねる貴重なセミナーであったと思う。前年の水俣セミナーに続いて環境社会学の原風景に触れることによって、環境社会学が大事にしてきた「現場に学ぶ」姿勢を改めて心に刻んだことが大きな収穫であった。

「沖島の暮らしとこれから」では、午前中に琵琶湖内に浮かぶ沖島を近江八幡市の深尾氏のユーモアあふれる案内のもとと周回した。淡水湖内の島で人が住んでいるのは世界的にも珍しいそうで、島内に建つ小学校のたたずまいを見学し、「猫の額」のような狭い平地に並ぶ家々の間を縫うように歩いた（下町の路地裏のような通りが「メインストリート」だとは！）。島民の方々は「島全体が一つの家」のように生活をしており、お盆の時期には道端で宴会が開かれるなど、「粘着度の高いコミュニティ」が今も営まれている。しかし島民の 3 割が高齢者となるなど、島を支えてきた漁業の未来は決して明るいとは言えない。

昼食時には、地元漁師の方に獲れる魚の変化について話を聞いた。その方は、魚種別漁獲量の推移を示したグラフを用意して説明して下さい。「琵琶湖は陸から水面を見れば確かにキレイになったかも知れないが、漁をしながら船から水底をみるとまだ汚れているし、獲れる魚も変わってきている。琵琶湖の環境は取り戻せ

ていない」のだそうだ。そして最後に「水のことはむしろ漁師が一番良く知っている」と付け加えたのであった。シンプルなグラフと素朴な言葉であるが、それを支える豊かな経験知が深みある説明を可能にしている。いくら精緻な測量を行ったところで、それを読み解く知識がなければ研究は空回りしてしまう。環境社会学が現場から学ぼうとしていたのは、まさにこうした現場に根差した知識なのだ。そのことを改めて感じた一日であった。

エクスカージョン 4

「里山の環境問題と地域社会の対応」に参加して 嵯峨 創平（環境文化のための対話研究所（IDEC））

第 1 日に実施されたエクスカージョン 4 は、滋賀郡志賀町大字栗原を訪れた。

志賀町は琵琶湖の西岸に位置する農村地帯で、特に栗原地区（約 90 戸、300 人）は人口の出入りがほとんど無く伝統的な社会組織や年中行事がよく保たれている集落だ。隣町は今森光彦氏の写真集『里山物語』で一躍有名になった所だ。栗原地区にも琵琶湖を見下ろすように棚田が発達しているが、冬の積雪や「比良八荒」といわれる強風のため農業条件が厳しい上に、近年は開発問題、産業廃棄物問題、獣害問題などがたて続けに住民を悩ませている。

われわれを迎えてくださった、徳岡治男氏、音羽利一氏、栗田氏の語り耳を傾けながら、日本の農村が戦後 60 年間に経験してきた社会環境の変化に改めて思いを馳せた。昭和 30 年代までの栗原地区は、傾斜地の水田と畑を二毛作で耕作しながら、共有地としての里山や琵琶湖の漁業権を複合したほぼ自給自足の集落であった。この頃の農村の暮らしぶりは、栗原地区に 10 年来通い聞き書き集を刊行した小坂育子氏（水と文化研究会）の著作『里山に生きる』に詳しい。高度経済成長を迎えた昭和 40 年代に入ると、減反政策の影響で昭和 45 年から 50 年の 5 年間で実に耕地面積の半分に減少する中で、早くも耕作放棄地の増加と獣害問題の発生、別荘地開発などが始まっている。昭和 50 年代には、産業廃棄物の不法投棄問題や残土処分地建設問題が持ち上がり、生活環境を守るための集落ぐるみの闘争を行った。昭和 60 年以降のバブル経済期には、ゴルフ場建設計画の立案と頓挫、跡地を買収した暴力団がらみの産廃業者に対抗するための県による土地買収と公的「産廃施設誘致」による環境保全策の選択（この経過で住民間の意見も大きく割れた）など激動の時期を経験した。加えて、近年はイノシシやサルが休耕田に入り込んで収穫直前の作物を荒らし、防御用の金網や電流柵などの施設費用が農家の経営をますます圧迫している。獣の生態系と人間の生活圏が重なり合うことで発生するトラブルの遠因を考えると、森林面積の縮小や餌の減少の問題があり、対処療法的な対策の限界に住民もよく承知している。

環境問題と社会問題が重層的に重なり合うこうした局面に暮らしを立てながら、古老たちの自然へのゆるぎない愛着、自他（動物も含めて）へのユーモアには感心させられた。徳岡氏が幼少の頃に教えられた「貧しくても、人には迷惑かけず、水を大切に使う」という共同体の規範。音羽氏の語るサルの被害談のなかに垣間見える生き物の知恵への敬意。古老達が体現している自然と共にある地域文化の全体性（コスモロジー）を、世代交代が進む今後の地域住民は持ち続けることが可能だろうか。環境「問題」としての農家・農政の対応と、環境「文化」としての生活者・地域社会の受け止めとの時間感覚のズレが気になる。

例えば、平成 13 年から始まった「栗原地元学」の活動は、行政や大学研究室が地区に入り込みながら、栗原の自然と人・人と人・人と心との「生活知」の要素を新たな形で顕在化させている。これらの要素を繋ぎ合わせて「計画化」が意図される時、地域社会で培われ身体化されてきた空間理解・社会関係の全体性はどのように継承され変容していくのか、新たな時代の住民自治の形、地域リーダー像の形成を占うポイントがそこに見出されるだろう。それは取りも直さず、地域研究に携わる者への新たな課題提示を孕んでいるのだと感じた。

「シンポジウム A 自然の再生というシナリオ」に参加して 今田 美穂（総合地球環境学研究所）

今回のセミナーテーマは、2003 年 12 月に京都で行われた、前回の「河川行政の転換と地域社会—今、改めて公共性を問直す—」の結果を受けてのものと思う。特にニュースレターの感想報告の中で、関西学院大学の山本早苗氏から、「滋賀県では、さまざまなシナリオが用意されているが、実際に地域にどのように受け止められ、咀嚼され、編集されなおしているのかということを検討してみる必要がある」との指摘がある。現

在、私のかかわっている研究プロジェクトにおいても、縦割りに付与されてきた計画や事業を再検討し、流域のシナリオを描きなおす方法論を提示することが大きな課題となっている。

これまでの治水・利水を目標とした河川政策の場面では、政策的権限と科学的知見をもとに進められてきており、社会科学の役割は不在であった。ところが、今まさに河川政策は、周辺社会が認めた環境「価値」を明確に描き出し、流域政策へ転換をとげることを志向している。そしてまた、鬼頭先生がしめくくったように「価値」を決定し、「担い手」となる人々が参画することが期待されている。

もちろん、ここに到るまでには、地域は開発による様々な環境変化を経験してきた。だからこそ、環境社会学がまず成しえるのは、開発のシナリオを受け止めてきた「人々の心」を描くことであると解釈する。そのことが、古川先生のおっしゃったムラの持つ歴史性をいかに将来につないでいくか、ということの答えにもなるであろう。その意味で、シンポジウムBで紹介された事例は大変興味深く、中でも上田洋平氏による聞きとりの成果を屏風絵に描くという手法は、地域の人々を幅広く議論に参加させ、現代のムラの「人々の心」を描く一つの試みになったわけである。

ふりかえって、シンポジウムAの報告はどうであっただろうか。早崎内湖再生の事例を含め、まだまだ回れ右した政策と事業ありきのものであったようにおもう。地域の豊かさを描くシナリオとのギャップは、何なのであるか。私見を恐れずに述べるなら、これまで環境社会学が主にテーマとしてきた生活者の変質があるのではないかと思われる。つまり、再生すべき自然とのかかわりを持つ人々が圧倒的に減少した、もしくはそのかかわり方が変わったという事実である。

2日目のエクスカッションで、エリ漁を営む守山漁港を訪れた。漁獲の多くが外来魚で占められている今、近辺から魚を買いつけにくる周辺住民の数もまばらである。しかし、それでも彼らが生魚を好むのは、安くて新鮮な魚に自身の好みで味つけできることである。家々で受け継がれた湖魚の調理法は、地先のムラやイエの歴史性でもある。ところが、わずかな魚を配分してもらおうと待ちかまえている女性に話を聞くと、「今でこそ酒やみりんをふんだんに使って煮つけるようになったけれども、昔は、調味料がなかったので醤油と梅で味つけていたのよ」という。家々に売り歩かれていた行商時代のムラの味は、漁協の味になり、いつのまにかメーカーの味に淘汰されている。

このことからわかるように、生活知の創造は身近な自然の状態に依存しなくなっている。今後、自然へのかかわりを通じて、その再生能力に鍛錬される「人々の心」を多様な枠組みで描きなおすことが、新たな生活知を導き出す指針となりうるであろう。この点で、自然再生のシナリオ作りにあたって、自然のモニタリングだけではなく、社会のモニタリングを同時に行っていくことに配慮したい。

どのようなシナリオをお持ちですか？～シンポジウムBを聞いて～

山室 敦嗣（福岡工業大学）

琵琶湖セミナーということで、『水と人の環境史』そして生活環境主義が、この現場から生み出されたことを感じたくてセミナーに参加された方も少なくないのではないだろうか。そのことを意識されながら、おそらく事務局の方々は、特別インタビュー「琵琶湖」というシナリオの来し方と行く末」というプログラムを組まれたのであろう。

一方、琵琶湖というフィールドの現在には、地元の人々による環境実践が数多くみられることを参加者に身をもって感じてほしい。その思いがシンポジウムA・B「地域の“シナリオ”をどのように生み出すか？」というかたちをとったのであろう。

これらのふたつの思いを橋渡ししようと事務局の方々は“シナリオ”という言葉を採用されたのではないだろうか。事務局の近藤隆二郎氏によると「シナリオとは、ある地域がこのようになって欲しいと思う姿（ビジョン）のことであり、その姿へのプロセスを指すこともある」。シナリオには、たとえば「計画」という言葉のもつ硬直的で無味乾燥的な響きはなく、書き換えの柔軟性や魅力性などの要素が前面にでてくる。とくに魅力性はシナリオの生命線だろう。魅力性の要素が重要になってくるシナリオという言葉によって、琵琶湖という大舞台で環境社会学の「上演」と地元住民の「上演」とが橋渡し可能になった。「対話」というより、魅力性を競う「競演」であった。そのために、環境社会学という学問を、科学性という見慣れた観点からではなく、魅力性という観点から受けとめなおす契機を得ることができたように思う。

とくに、シンポジウムBでの深尾甚一郎氏・上田洋平氏・藤田知丈氏の3氏のご報告は、シナリオにかか

わる学間に対して数多くの示唆を含んでいた。深尾氏は、近江八幡市職員の立場から、「沖島 21 世紀夢プラン」というシナリオを KJ 法という方法を選択して沖島住民と共作された。上田氏は、地元の大学による地域研究という立場から、住民と地域の自然環境とのかかわりを感じ体験からすくいとろうと「心象図法」というシナリオ・ライティングの方法を編み出された。藤田氏は、「琵琶湖をキレイにすることをライフワークに」という立場から、「エコ村構想」のもと「小舟木エコ村」というシナリオ・ライティングを進められている。

3 氏は自らのシナリオ・ライティングの方法やシナリオの紹介をされただけで明示的に環境社会学研究者である我々へ問いかけられなかったが、3 氏の実践がそれとなく問いかけているのは次のことではないだろうか。“環境社会学研究者のあなたは、かかわっておられるフィールドで、どのようなシナリオをお持ちですか？”そして“そのシナリオは地元にとってどれだけ魅力あるものですか？”と。

6 事務局より

6-1. 新入会員の紹介 (2004 年 5 月～2004 年 10 月承認分の入会者 38 名、五十音順)

住所など詳細情報につきましては、次回の追加・訂正版会員名簿に掲載いたします。

- (正) 荒田 鉄二 (あらた てつじ) 吉備国際大学 政策マネジメント学部 環境リスクマネジメント学科
- (正) 井勝 久喜 (いかつ ひさよし) 吉備国際大学 政策マネジメント学部 環境リスクマネジメント学科
- (正) 石川 宏之 (いしかわ ひろゆき) 川崎市総合企画局政策部
- (正) 井ノ口 香子 (いのくち きょうこ) 株式会社 宣伝会議 環境人間会議事業部
- (院) 猪瀬 浩平 (いのせ こうへい) 東京大学大学院 総合文化研究科 文化人類学研究室
- (正) 今井 信雄 (いまい のぶお) 神戸大学 自然科学研究科
- (正) 岩崎・グッドマン まさみ (いわさき・ぐっどまん まさみ) 北海学園大学
- (正) 岩重 博文 (いわしげ ひろふみ) 広島大学大学院 教育学研究科 住居学研究室
- (正) 岩松 文代 (いわまつ ふみよ) 北九州市立大学 文学部 人間関係学科
- (正) 上杉 真平 (うえすぎ しんぺい) 崇城大学工学部環境建設工学科
- (院) 岡田 久仁子 (おかだ くニコ) 岩手県立大学大学院総合政策研究科
- (正) 小川 仁士 (おがわ ひとし) 県立広島女子大学 生活科学部 生活環境学科
- (正) 尾鷲 瑞穂 (おわし みずほ) 東京大学経済学部資料室
- (正) 貝澤 耕一 (かいざわ こういち) 平取町教育委員会文化財課アイヌ文化環境保全対策室
- (院) 何 大勇 (カ ダイユウ) 総合研究大学院大学/総合地球環境学研究所
- (正) 川手 俊彦 (かわて としひこ)
- (正) 倉本 宣 (くらもと のぼる) 明治大学農学部
- (院) 鈴木 伸二 (すずき しんじ) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
- (正) 高橋 聡 (たかはし さとる) 豊田市矢作川研究所
- (正) 田原 範子 (たはら のりこ) 四天王寺国際仏教大学
- (正) 鶴田 佳史 (つるた よしふみ) 中部大学
- (院) 中川 千草 (なかがわ ちぐさ) 関西学院大学大学院社会学研究科
- (院) 永田 洋子 (ながた ようこ) 早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科
- (院) 中山 琢夫 (なかやま たくお) 同志社大学大学院 総合政策科学研究科
- (正) 早川 留美子 (はやかわ るみこ) WWF ジャパン 自然保護室 海洋・沿岸域保全プログラム 有明海プロジェクト担当
- (院) 林 陽一 (はやし よういち) 早稲田大学人間科学研究科
- (正) 平田 昌弘 (ひらた まさひろ) 文部科学省大学共同利用研究機関 総合地球環境学研究所
- (正) 古家 強 (ふるや つとむ) (株) 毎日経済通信社大阪本社
- (正) 馬路 泰藏 (まじ たいぞう) 岐阜大学教育学部

- (正) 益子 将明 (ますこ まさあき) 専門学校アースビジネスカレッジ 環境ビジネス学科
(正) 宮澤 聡子 (みやざわ さとこ) 恵泉女学園大学人文学部
(院) 村上 貴司 (むらかみ たかし) 南山大学大学院 経済学研究科
(院) 村上 吉史 (むらかみ よしふみ) 広島大学大学院生物圏科学研究科
(院) 安田 章人 (やすだ あきと) 京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究科
(院) 山崎 尚司 (やまざき たかし) 関西学院大学大学院 総合政策研究科
(正) 吉村 妙子 (よしむら たえこ) 東京大学大学院 農学生命科学研究科 演習林/農学特定研究員
(院) 淀野 順子 (よどの じゅんこ) 北海道大学大学院教育学研究科
(正) 渡辺 義久 (わたなべ よしひさ) スカイビルサービス株式会社

6-2. 退会者

大黒昭久 奥田憲昭 小椋博 鴨志田康弘 中川美利 服部牧夫 平木隆之 楊軍 吉澤庸子 (03年度末)
杉浦未希子 (04年度末)

本号作成は、学会事務局・平川全機（北海道大学大学院）が担当しました。

『環境社会学会ニューズレター』

第35号 (通号40号)

発行日：2004年11月1日



JAES Newsletter

No.35

November 1, 2004



編集・発行：環境社会学会事務局

〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目

北海道大学大学院文学研究科 宮内泰介研究室内

Fax：011-706-4150

E-mail：kankyo@reg.let.hokudai.ac.jp

郵便振替口座：00530-8-4016

口座名：環境社会学会

<http://www.soc.nii.ac.jp/jses3/>
